

太平洋戦争中、特攻機の発進基地だった陸軍熊本飛行場(熊本市東区)の航空機格納庫「掩体壕」の遺構が確認された。地権者で女子ゴルフの古閑美保さん(35)の父、宏二郎さん(56)が専門家に調査を依頼して判明した。熊本飛行場の遺構は他に残されておらず、今後さらに調査を進める方針だ。

掩体壕は、太平洋戦争中に航空機を米軍の空襲から守るため飛行場周辺に分散してつくった防御用格納庫。今回確認された掩体壕は滑走路があった場所から約2キロ離れた現在竹林になっている。「C」字形の土塁で、高さ約3メートル、最大幅約20メートル。屋根がない「無蓋掩体壕」で、当時は土塁に竹の骨組みや草木で機体を覆って隠していたとみられる。

昨年12月、自宅に隣接するこの土地を購入した宏二郎さんが、幼少期に

熊本に屋根ない掩体壕

太平洋戦争中 特攻機格納か

大人が周辺を「掩体壕」産ネットワーク」代表の高谷和生さん(63)に調査することを思い出し、戦争遺構の保存に取り組む「くまもと戦争遺跡・文化遺産」に土塁が残っているのを



現在は竹林となっている無蓋掩体壕を調査する高谷さん(左)と古閑宏二郎さん。熊本市東区戸島本町で22日

見つけた。熊本飛行場は太平洋戦争末期、米軍が制圧した沖繩の飛行場に強行着陸を図る特攻隊「義烈空挺隊」が発進したことで知られる。高谷さんによると、特攻機の掩体壕は上空から目立つ滑走路から離れた場所につくることが多く、この掩体壕も特攻機用の可能性があるという。

屋根のある「有蓋掩体壕」は全国で現存が確認されているが、土塁が主体の無蓋掩体壕は戦後の開発で壊されて完全な形で残る例はほとんどないという。宏二郎さんは「戦後73年にして見つかかり、戦禍に散った方々の思いも感じる。調査に協力して全容を明らかにしたい」と話している。

【野呂賢治、写真も】